

て海拔三四・一メートル前後のレベルまで掘り下げた(第37図)。その結果、土堤は旧地表上に盛土したものであり、また旧地表を掘り下げた落ち込みが検出されたが、保存を要する遺構は認められず、遺物も出土しなかったので、予定通り工事を実施した。工事中にも掘削に職員が立ち会ったが、遺構・遺物等は検出されなかった。

標準的な地層は次のとおりである(第38図)。

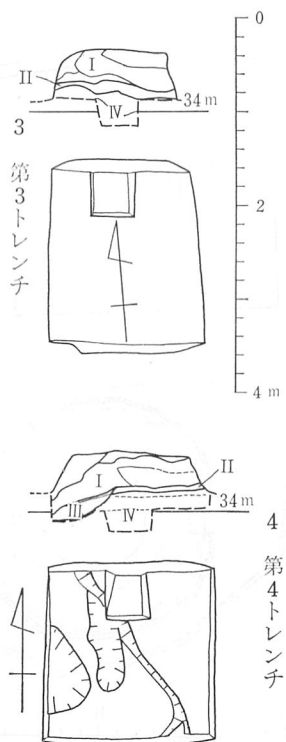
I層 盛土

II層 旧地表

III層 旧地表を切って掘り込まれた落込みの埋土

IV層 地山、粘土及び砂の互層よりなる自然堆積層

現存する土堤は、両法面を削りとられているが、旧師団長官舎の北側に遺る土堤や陵墓地形図からみて、本来、その断面は整った台形で、官舎の敷地は、旧地形を現在の地表と同じレベルに削平したものと考えら



第38図 杏塚陵墓参考地トレンチ平面および断面図(1/80)

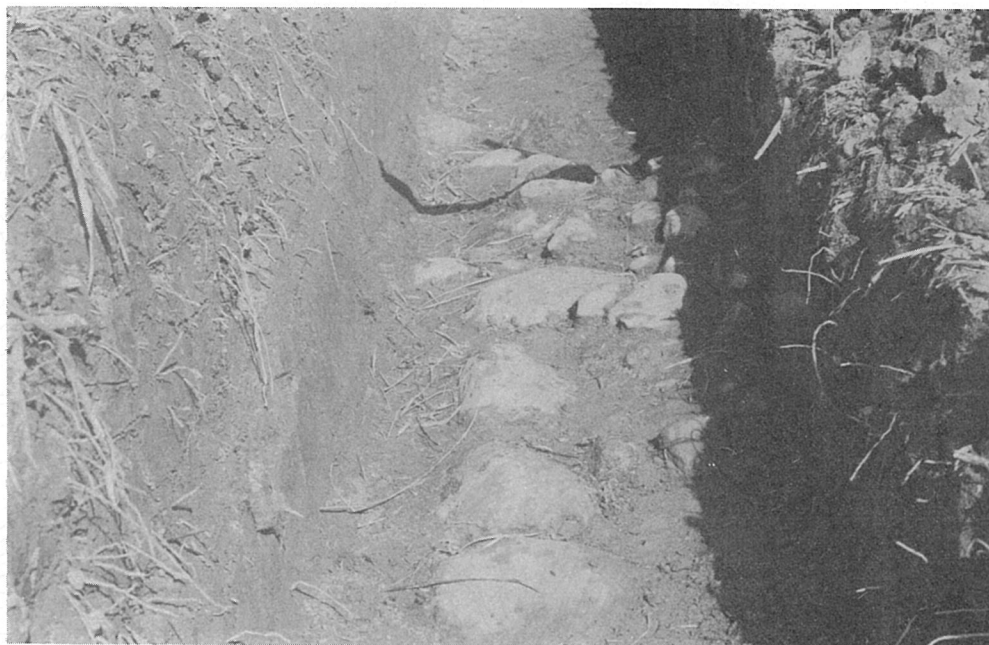
れる。したがって、土堤は旧地表に盛土するとともに、旧地表、地山をも削って造られたものと思われる。

第4トレンチに、旧地表を不整形に浅く掘りこんだ跡と、おそらく円形になると思われる掘鉢状の土壙とが見出された。ともに、遺物もなく、性格も明らかにできなかった。

(笠野 毅)

檜隈坂合陵外堤護岸及び漏れ止工事箇所調査

欽明天皇の檜隈坂合陵の整備工事に立ち会ったところ、事前調査の第12トレンチと第13トレンチ(本誌前号に報告済み)の間で、二箇所に入為的な礫群が検出された。ともに養生して、外堤護岸の下に保存した。礫群の一つは、径三五〜四五センチ程の円礫を、護岸工事基礎掘方に



第39図 檜隈坂合陵礫群の出土状況

沿って列べ、この上に墳丘と同じ傾斜をもつ（すなわち、外堤法面とは逆勾配になる）ように径一〇センチ前後の円礫を置く。掘削床面に長さ三・五、幅〇・七メートルにわたって露出している（第39図）が、ボーリングステッキの探査によれば、長五、幅一・六メートル以上の範囲にひろがる。この礫群の直上から、少し角のとれた須恵器の小破片が、遊離した状態で出土した。円礫は花崗岩や砂岩。礫群を覆う土は、外堤の自然堆積土層と思われる。この礫群の性格は不明である。

もう一つの礫群は、拝所の入水口の下にある。径五〇～六〇センチの角のとれた大きな礫を主体に、五～一五センチの小礫を混じえ、これら大小の礫を雑然と盛り上げて置いている。入水口に付属する施設たとえば水たたきではないかと思われるが、確証はない。

二つの礫群は、護岸工事に際して次のように保存した。基礎は、礫群の部分に打たず、礫群を粘土で目潰しをしてビニールシートで覆い、この上に石積みをした。このほかに遺構・遺物は検出されなかった。

（笠野 毅）

泉涌寺雲竜院内陵墓地土塀改修工事箇所 の調査

泉涌寺雲竜院内陵墓地（後光厳天皇分骨所以下二分骨所一灰塚五墓）の土塀が老朽化したのでブロック塀に改めることとなった（第40図）。そこで昭和五十四年十二月に旧土塀を基礎から撤去してその跡に新たに